発行人　金沢真宗学院
代表者　小　林　　斉
金沢市安江町 15 - 52
金沢教務所内
電話　076 - 265 - 5191

震動

第 26 号

亀毛（きもう）のごとし

能浦真成

私が得度した時の写真を見たことがあります。本山の外縁にて直綴・墨袈裟で口をとがらせています。琵琶湖の遊覧船の上でふてくされています。びわ湖タワーの下でも、おどける弟の横で仏頂面です。剃髪したくなかったからです。

当時、九歳の少年に剃髪などという言葉は通用しておらず、夏休みにつるっパゲにするという一大事によって、小学校入学以来三年とちょっとで積み上げてきた地位が、立ち処が、ポジションが消え失せると思っていましたし、九月一日までにどれだけ髪が伸びるのかだけが心配でなりませんでした。ザ・悲壮感を過ごした小学四年生の夏休みでした。

あの漫談家のフレーズを拝借。あれから四十年。が経とうとしています。外縁で口をとがらせていた私ですが、昨今団体参拝や、准堂衆としての参勤と、上山する機会を多くいただいています。ある時、いつもの如く御影堂門を頭礼してくぐろうとした際に、その敷石すべての角が柔らかな丸みを帯びているのが目に入いりました。「この堅い石が、こんなになるまで、いったいどれだけの人がこの門をくぐったんだろう…?」と。五劫の擦り切れの天女さんも仰天しているかもしれません。

『真宗本廟（東本願寺）造営史』諸言に

東本願寺は（中略）数多の聞法者の歓喜と謝念によって、今日まで伝承護持されてまいりました。と記されています。何人そこを通ったかが肝腎なことではなかったのかもしれません。敷石の角を丸くしたのは、聞法者の歓喜と謝念がそうさせていたのです。

正信偈の結歓には

弘経の大士・宗師等、無辺の極濁悪を拯済したまう

とあります。三部経の精神を弘めたのは、「大士」「宗師」「等」であると述べられます。「大士」と「宗師」は、七高僧を指すのでありましょうが、それでは、はたして「等」とは誰のことなのでしょうか。以前、真宗学院の特別講義にて「等」は僧伽であると教えていただきました。弘経してきた一人一人の七祖の後ろには、無数の大衆がいるのだということです。大衆一人一人が、その教えにうなずき、仰ぎ、立ち上がった念仏者の仲間が「等」なのであります。

日々「帰命無量寿如来　南無不可思議光」と表白し、「弘経大士宗師等　拯済無辺極濁悪」と勤めているのは形だけで、「等」という殊更な呼びかけに無自覚にいる私がいたのでした。「亀毛のごとし」（聖典一六九頁）といわれる実体のないものの例えは、まさに私のことでありました。「等」は経典や正信偈に登場するビックネームな高僧だけではなく、今を生きている君も含まれるのだぞ。という叱咤にさらされた思いでありました。

さて、あれだけ執着していた髪の毛も、今となっては頭頂部より自然にグッバイの日々であります。亀の甲羅に付着するコケがうらやましいくらいです。それでも今は、「『等』は『私』のことです。」と言えるような仏道を歩んで行きたいと思っています。

真宗学院を卒業して

齊藤　優華

仏法の教えが、どれ程多くの人々の苦悩と、その願いの上に受け継がれてきたのか。そういう長くて深い歴史の重みと、今も変わることのない人間の本性を、学院での学びを通して知らされた。今、学院へ通えない寂しさを感じつつ毎日の日常に追われた生活にあっても、三年前には考えもしなかった慶びと問いの中で過していると思う。

寺に育ちながら何一つ知らずにいた私には入学してからの生活に「やっていけるのだろうか」という不安と、知らないことへの恥かしさや焦りがあった。けれど授業の中で「法話をよく聞きに来るおばあさんが『足の裏で聞きました』と話された」お話しや「出席が大切」と言われた言葉に、私もとにかく身を運ぼうと、眠さと戦いながら車を走らせ、意味も分からずノートをとった。学院には、私たちの為に時間を作り熱く指導して下さる先生方や関わって下さる方々、学院でないと訪れることのない場所。初めて知る教え、人間の姿や考え方。修練での仏道の生活。そして共に学び語る朋。本当に沢山の出遇いがあり、大変なことも含めて学院が楽しみとなった。一方で学べば学ぶ程迷い悩む問いも生まれた。

学院は学び方を学ぶ場だと、ただただ身を仏法に浸し日常と教えを行ったり来たりした三年間。休まずに通えたことも私に仏の教えを届けて下さった様々な必然の上にあるのだと感じる。そして、本当の学びがこれから始まる。

三界に生きる凡夫であることを自覚し、一つ一つの気付きを大切に聞き続け、問い続けて行けたらと思う。今を慶び手を合わせていきたい。そして、学院での出遇いをずっと大切に歩んでいきたい。本当に貴重な三年間をありがとうございました。

藤原　慈

今年の春、金沢真宗学院を卒業しました。それは同時に、『真宗門徒の僧の始まり』の瞬間でもあります。入学した当時は、「長時間の正座に耐えられるか」「難しい漢字のお経の言葉を覚えられるだろうか、話せるだろうか」という不安を抱えながら入学式に臨みました。真宗宗歌を歌い出した瞬間から、いよいよ始まるんだなと感じたことは今でも記憶の中にあります。

元々コミュニケーションに疎い私でしたが、明るく接する仲間との出遇い、講義や声名作法で声を高々に語りかける先生方の法の叫び、諸研修や修練の学びは、それまでに胸の奥底に懐いていた先入観が打ち破られ、真宗門徒として生涯を掛ける決意を固めた尊い御縁でありました。

学院生活の学びの中で、「内なる靖国」の存在に気づかされたことが大きな転換となりました。「靖国」という名の「感情の錬金術」によって植えつけられた『内なる靖国』が、戦後になっても我々生命の流れの奥底の無意識に深く根付いて、それが、精神・生命活動の自由を奪う「差別心」となって表れ、現代に「つながり」を失わせる退嬰(たいえい)的苦悩の渦を引き起こし、いつしか低年齢層自殺や官僚の犯罪にまで及ぶようになった。そんな心が私の中にすでに染みついていて、消えてなくなることはない。こんな申し訳のない迷信心をひきずってる「罪悪深重・煩悩熾盛の私」だからこそ「己を問い続ける」大切さ、そんな私に寄り添いたもうお念仏の喜びの尊さが思い知らされました。

卒業式(2018年3月28日)

この上は、『内なる靖国』という名の自力の迷心と決別し、常に自己の姿を問い続けて聞法精進に励み、十方にお念仏の教えを伝えて参ります。

キャンパスレポート

二年生　井上ゆり枝

先日冷蔵庫を開けたら、メープルシロップの重たい瓶が足の指に落下。「痛い、痛い」とギャンギャン騒いでうずくまっていると、夫がキッチンを覗きに来た。「メープルシロップが、冷蔵庫から落ちてきたのだ」と訴えると、床に転がっていたメープルシロップの瓶と、その隣にあった柚子シロップの瓶をじっと見て言う。「もしかして、メープルシロップの隣にあった柚子シロップを引き抜いて、そのせいでメープルシロップが落ちてきたわけじゃないよね？」と。「ご明察。柚子シロップを取ったら、メープルシロップが勝手に落ちてきた」と私は答えた。「それは落ちてきたのではない。落としたんだ」「いや、落ちてきた」「原因を自身に見つけられない限り、同じことを繰り返すよ。その足の指の痛みは煩悩の痛みだ」「ひどい。余計に痛くなってきた」

真宗とは無縁だった私が、結婚して金沢に来て一年。一年前とはまるで違うこんな日常を送りつつ、寺に生まれた夫と共に真宗学院に通っている。たくさんのご縁をいただき、授業や法話を聞きながら、自身を振り返る機会をいただいた。学歴、年収、周りからの信頼……そういったものに寄りかかっていないと思っていた自分が、いかにそれらに縋（すが）っていたかに気づかされた。あるいは、私という存在が以上も以下もない、ただの私であることを思い知らされた。それでもなお、私ではなくメープルシロップが悪いのだと思い、思い通りにならないことに腹を立てる私がいる。一年経っても、私の身勝手さや傲慢さは少しも薄まらないが、あれもこれも当たり前ではないと感謝することは増えたように思う。いただいたご縁に感謝して、残りの学院生活も歩んでいきたい。

二年生　図書　武典

真宗学院に入学させて戴き二年目を迎えることができました。

入学当初、世界遺産合掌造り集落の道場の後を継ぐ為と、「～しなければならない」という気持ちだけでした。

しかし、一年間真宗学院での授業や、指導の方々や同期の方々と接し、仏教を少し見つめていくうちに、形や物質の外観にとらわれている誤りに気づきました。

建物や形式、世間体を守るのではなく　仏教を通して自己や死を見つめ、生きている尊さ、念仏の中にこめられた感謝の言葉を子供たちに伝えていくことが仏教の最も大切な本質なのだと気づきました。では伝えるためにはどうすればいいのか。

どんな言葉にも、意味、想い、響きが存在します。意味、想いだけでは相手に伝わりません。伝えるために必ず響きによって伝えなければ心に届きません。

「南無阿弥陀仏」という言葉は響きとなって人の心の中に浸透し伝わってきました。

口で唱え、耳で聞き、その響きが心の中に浸透して受け継がれて伝わってきました。

自分はこれから、念仏の意味と想いを少しづつ理解し、まずは念仏を己の心に響かせることが最初の一歩だと思います。

自分がまだ幼い時、念仏は死者のための呪文だと思っていました。

念仏の響きは、今生きている私達の為の問いそのものだと気づかされます。

死を見つめ生を見つめ、自分を見つめ、釈尊の言葉の響き、親鸞聖人の言葉の響きを聴くことが、今生きている私たちにこそ一番必要なものだと思います。

近い将

宮森忠利先生の特別講義（2017年7月25日）

来、集落の方々や、子供たちの心に響くように、大きな声で声明を唱えていきたいと思っています。

このかけがえのない響きを、頭と体と心で問う機会を得ることができていることに、只々感謝です。

三年生　齊藤美和子

私がこの真宗学院での学びを選んだきっかけは『宗教は本当に必要なのか』という疑問からでした。やがて授業が始まり、それは『必要不必要ではなく、元々自分の中にある』という答えに辿り着きました。空気や水の様に生きてゆくために必要なものではなく、どちらかといえば『感謝・罪悪・尊敬』に近い、元々眠っていたものが何かをきっかけに起こされるもの、気付かされるものだと感じました。自分に都合の良いことをされると「ありがとう」と感謝という感情を知り、悪い行いで罪悪を知る。こうして道徳を覚えるように、何かを機に、その時が来たら自分の『宗教心』に気付かされるのではないでしょうか。

では、その『宗教心』の表れとは何か。感謝が「ありがとう」罪悪が「ごめんなさい」ならば、浄土真宗は「お念仏」「ナムアミダブツ」になるのでしょう。そう、言葉では答えられます。でもその言葉の真意は？

『宗教心』とは宗祖教祖の教えを信じ尊ぶ心だと私は思います。疑問を抱いて門を叩いたこの学院で、私は指導して下さった先生方から学び、仲間から力を貰い、この浄土真宗の教えに悦びを感じました。この悦びこそが私の宗教心です。仏教、浄土真宗の御教えから、今現代を生きる私達の生活の導きになるお言葉に出合えました。日常の生活の中でも、学院関係者の皆様や仲間、そして有縁の方々からの多くの言葉触れ合いが私の人生になっています。素朴な疑問がきっかけになり、私に気付かせてくれました。

さて『ただお念仏申す』の真意とは何でしょう。多分答えは貰っています。しかしその答えが腑に落ちないから答えられないのが現状でしょう。残り一年の学院生活で出遇えたら嬉しいです。

報恩講（2018年1月15日）

三年生　且見　健

私は三年前に結婚が縁でお寺に入り、二年前に金沢真宗学院へ入学させていただきました。金沢真宗学院へ入学した年の7月からは、縁をいただき富山県の南砺市にある城端別院善徳寺で勤務させていただいております。

正直初めの頃は、職場もお寺、学校もお寺、当然家に帰るとお寺。激変した自身の生活に自分自身が付いて行けてなかったと思います。

そんな私の話を聞いていただき、アドバイスをしていただける学院の先生方、学業を最優先にと仕事をカバーしてくださる別院職員の方々、色々とアドバイスをしてくださる別院へ布教に来られる布教使の先生方、そして家族。沢山の方々に支えられ学院生活を送れているのだと今は、感謝の気持ちを忘れずにまた感謝の気持ちを忘れてしまいそうな日はそれを問いとし、一日一日を大切に学院生活を送らせていただいております。

また二年生の一年間はクラスの世話役を務めさせていただきました。二年生になって最初のクラスの親睦会は参加人数も正直少なかったのですが、八月の前期修練からクラスが一つになってきた様に感じ、三月の卒業生を送る会では、実行委員を中心にクラス全員が協力し卒業生を送ることができました。

二年間学院生活を送らせていただき、授業の内容はほとんど頭に残っていないのですが、学院生活がスタートしたことによっていただいた縁、その縁を通して自分自身への問いの生活がスタートできたのだと思います。

異なった環境下で、年齢層も幅広いクラスで残り一年、多くの方々と語り合い、自分自身の問いを深めていければと思っております。

報恩講法話（2018年1月15日）

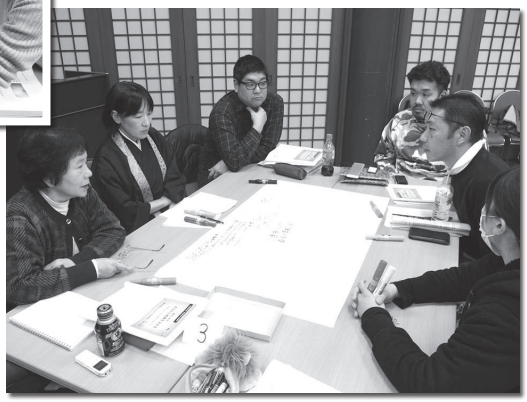
真宗学院一泊研修会

日　時　２０１８年２月１７日(土)午後４時～１８日(日)午前１０時
場　所　真宗会館・東別院会館・教務所
テーマ　現代と真宗　大切な人を亡くすということ～お寺から死別を支える～
講　師　尾角光美 氏(一般社団法人リヴオン代表)

グリーフとは、大切な人々との離別や大事なものを失うことで生まれてくる反応や感情、そのプロセスを表しているそうです。

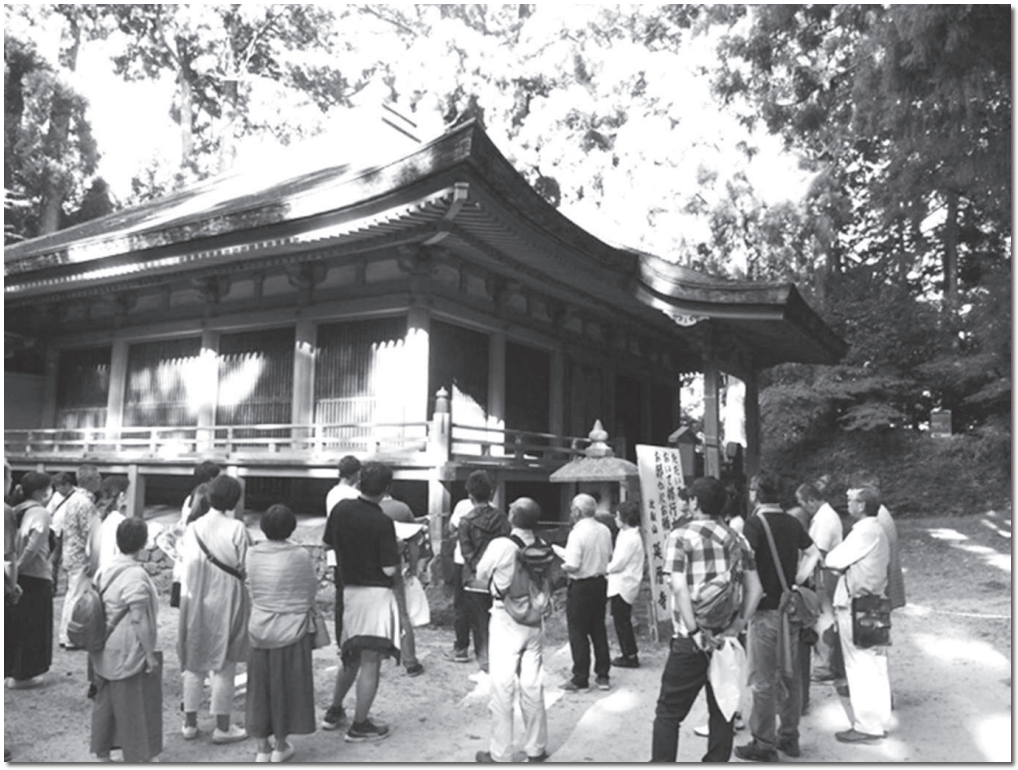
深い悲しみによる閉塞感を破り次への第一歩を踏み出す大切な機縁になるのは、やはり人との出遇いだと思います。

九卓それぞれ六人のグループに分かれ、皆さん活発な意見を交換し合っていました。



比叡山延暦寺西塔・常行三昧堂

親鸞聖人がこの三昧堂で「堂僧」をされていたという記録があります。中国天台より伝わる常行三昧の行法とは、念仏を唱えながら、九十日間、阿弥陀仏が安置されている堂内を歩き廻りつづけるものです。聖人は、どのような思いで修行をされていたのでしょうか。



学院移動研修会

日　時　2017年9月2日(土)
～3日(日)

場　所　比叡山延暦寺

テーマ　「宗祖親鸞聖人ご旧跡参拝」

比叡山参拝部の
星野さんより、
仏華のお話を
いただきました。

『教行信証』入門②
僧伽の仏道

平野　修

前回申し上げたことですが、『教行信証』には、その撰述の理由として「仏恩報謝」、「知恩報徳」ということが繰り返し述べられています。それは、仏の恩を知って、その恩に報いていく場として、この世の中が見出されてきたということを意味します。

仏教の伝統から言えば、この世は捨て去られていく場所という捉え方があるわけです。あるいは今日では、それと逆に、自分の夢や願いを実現していくことがこの世の中を生きる態度なのだという考え方もある。どれもこの世に対する生活の態度です。

けれども親鸞聖人の生き方を見ますと、この世は知恩報徳を尽くしていく世界なのだと。そういう宗祖の受け止めは、我々に一つの生活の指針を与えてくださるのではないかと思うのです。そしてそこには、仏教の世界の広まりがあります。

『教行信証』をお書きになられたということは、当然伝えるということがあったわけですが、仏法僧の三宝が成立するところに仏教が伝わるということがあります。その場合、だれに、どういう形で伝わったのかという問題を表しているのが、出家、在家という言葉です。

仏教は、最初は出家を生み出すという形で伝わっていきます。ですから仏法僧の僧と言ったときには、出家者が構成員で、在家はそのなかにはいなかった。それが歴史的、文献的にみて、善導大師（六一三～六八一）の時代に、仏法僧の僧に広まりが出てくるわけです。

善導の『帰三宝偈』は「道俗時衆等」（聖典一四六頁）と始まります。「道」は出家、「俗」は在家ですが、その偈前の文には、「まず大衆を勧む、発して三宝に帰し」とあって、善導は、仏法僧の僧を、道俗ともにという意味で、「大衆」と了解された。これは善導大師が初めてと言っていいかと思うのです。

日本の仏教も、仏法僧の僧と言えば、出家の僧を中心として展開していきます。そこに善導大師と同じく、「道俗ともに」という基礎を開かれたのは法然上人です。そしてそれを受けて親鸞も、『正信偈』の結びで、「道俗時衆共同心」。「道であれ俗であれ今の時を生きる人々よ」という意味です。

つまり出家だけに仏の教え、仏の証りが関係すると考えられてきた仏教の歴史のなかに、在家のうえにも、つまりどういう生活をしているものであっても仏教が関係するということを、「大衆」とか「道俗時衆」が表しているわけです。

仏法僧の僧を「僧伽」と言いますが、これは通じ合う間柄を指す言葉です。その通じ合うという場合、二つの内容が考えられます。一つは仏と通じ合う。出家者だけでなく、在家の生活をするものの上にも仏の証りが通ずる。そういう一面がまず考えられます。そしてその仏と通じ合ったその内容は、他の人々にも通じていく内容を持っている。

『教行信証』の「教巻」は、

「謹（つつし）んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向（えこう）あり。一つには往相（おうそう）、二つには還相（げんそう）なり。」

（聖典一五二頁）

こういう言葉から始まりますが、この仏と通じていく方向を、伝統的な言葉で「往相」。その内容は「自利」ということになります。そして仏と通じ合ったその事柄は、また他の人々と通じていく。これが「還相」、別の言葉で言えば教化。自利ということに対しては「利他」という問題になります。仏と通じていくことが、他の衆生とも通じていく。そして通ずるということで形成されていくものが僧伽と言われるものです。

『末燈鈔』という、親鸞聖人の書簡を集めたものがあります。その八十八歳のお手紙に、

「故法然聖人は、「浄土宗のひと

は愚者になりて往生す」と候いしことを、たしかにうけたまわり候いしうえに、ものもおぼえぬあさましき人々のまいりたるを御覧じては、往生必定すべしとてえ（笑）ませたまいしをみまいらせ候いき。ふみざた（文沙汰）して、さかさかしきひとのまいりたるをば、往生はいかがあらんずらんと、たしかにうけたまわりき。いまにいたるまでおもいあわせられ候なり。」（聖典六〇三頁）

「ものも覚えられないあさましい人たち」、つまり文字も知らず、生活にかかりはて、生きることにすべての時間を費やしているものたち。いわゆる「俗」です。そういう人々がやってくるのを見て、にこっと笑われて、ああこの人たちは間違いなく往生なさるであろうと。

そして、文字も読めて、仏教の教理について「さかさかしく」、つまりいかにも賢そうに論議する人たちには、往生はどうであろうかというのですから、通じ合った内容は、いままで考えられてきたものとは違うものがあるようです。

さかさかしき人たちに了解されている事柄は、さかさかしい人たちには通じるかも知れないけれども、ものもおぼえぬあさましき人たちには通じない。けれども法然が仏様と通じた内容は、ものもおぼえぬあさましき人たちと通じていく内容であったと。これは教化の問題なのです。

しかし、そこで一つ考えなければならないのは、『末燈鈔』にあるように、法然上人や親鸞聖人の当時の人たちが、辞書を調べ、専門的な言葉を理解しようと努力した末に通じたという話ではないわけです。それこそものもおぼえぬあさましき人たちに通じていったというのですから、我々が考えている通じ方とは違っているわけです。するとここに、改めて教化という問題を考えていく糸口があるように思います。

如来の証りが実現する新しい仏法僧の僧の意味が確かめられていったわけですが、もう少し一般的な言い方になると、「人」という言い方、人が誕生する、人として誕生するという、この「人」ということが親鸞によく用いられている言葉ではないかと思うのです。

仏と通じそして通じたものが他の衆生にも通ずるという、その通ずることで何が出てくるのかというと、人というものが生まれる。人が誕生するのだと。

これは確かめてもらいたいところですが、『教行信証』のことを、細かに問題にされているという意味で「広本」と呼ぶのに対して、「略本」と呼ばれる著作が宗祖にあります。それが『浄土文類聚鈔』ですが、そこに

「明らかに知りぬ。二尊の大悲に縁りて、一心の仏因を獲たり。当に知るべし、この人は希有人なり、最勝人なり。」

（聖典四二一頁）

つまり信心が獲得されたということを、人という言葉で言い表されるわけです。

この「希有人」とか「最勝人」という言葉は、この世の中で最もよく認められたということを表しています。単にいい人ということではなく、本当に素晴らしいと認められた。存在が認められた。自分がここにあることを希有、最勝と認められる。

認められるということは通ずるという意味です。通じないということは認められない。自分がいるにもかかわらず認められない。存在が通じていない。ところが仏と通ずることによって希有人、最勝人と認められた。そういうふうに通じていったと。

あと二か所ほど見ていただきたいのですが、『入出二門偈』に、

「この人はすなわち凡数の摂にあらず、これ人中の分陀利華なり。この信は最勝希有人なり、この信は妙好上上人なり。」

（聖典四六六頁）

「分陀利華」というのは白蓮華のことですが、そのつぎに「人」ということを「信」という言葉で表現しています。信と人という言葉が同じ意味として使われている。

ですから、我々は信心というと心の中の問題のように考えがちですが、宗祖の了解は、信心ということをもって人を表す。人ということが信心なのだと。これは随分趣が違うわけです。

また、これは『一念多念文意』ですが、

「また『経』(観経)にのたまわく、「若念仏者　当知此人　是人中　分陀利華」とのたまえり。(中略)分陀利華を念仏のひとにたとえたまえるなり。このはなは、「人中の上上華なり、好華なり、妙好華なり、希有華なり、最勝華なり(散善義意)と、ほめたまえり。光明寺の和尚の御釈(散善義)には「念仏の人をば、上上人・好上・妙好人・希有人・最勝人」と、ほめたまえり。」　(聖典五三七頁)

と、「人」ということが問題にされていまして、つづいて同じく善導の『観念法門』の「常照是人」という言葉にあたって、

「「是人」というは、「是」は非に対することばなり。真実信楽のひとをば是人ともうすなり。虚仮疑惑のものをば非人という。非人というは、ひとにあらずときらい、わるきものというなり。是人は、よきひとともうす。」　(聖典五三八頁)

この「是人」は、これが人というべきものでありますという意味になります。この人でなく、これこそ人だと。どういうことが本当に人といえるのか。真実信楽の人、これこそ人であると、信心をもって人を表している。仏と通ずることによって得られるものが人ということなのだと。

今日のように人間であることが前提になっている時代と違って、人間になることが絶えず問題になっていた時代、人間と反対の概念としてあったものは、地獄・餓鬼・畜生、三悪趣と言われる人間を失ったあり方。また鬼神とか魔という、人間以上の強い力を持つ存在。そういう地獄・餓鬼・畜生に転落していくようなあり方を離れ、魔や鬼神、そういうものに振り回されるようなあり方も離れて、自分という存在の意義がよくよく認められたところに人という言葉で語られ求められるものがあったかと思うのです。

そういう、仏に認められて自らを人として名告ることができ、その認められたことが他を人として認めることができるということが、僧伽ということで形成されてきた内容です。そういう僧伽の形成ということが、宗祖が『教行信証』を撰述されたことの中に見ることができるかと思うのです。自らが人となり、そして限りなく人が誕生していくことが願われて、『教行信証』をお書きになられたかと思うのです。

ここまで前回申し上げられなかった点を補充しておきまして、次に進みたいと思います。

――――――――――――

レジメを用意して、問題を提起してあります。

仏教は行・証がいのちである。行とは証にいたる道であるから行という。しかし今日は、行といえば努力して困難なことをすることのように考えられていて、必ずしも証と関係しないものになっている。そんな状況の中でいえば、浄土真宗は行らしい行がないように考えられるし、またそんなふうにも受け取られている。もしそうであれば、浄土真宗は仏教でなくなってしまう。

(イ)浄土真宗の行・証とは

(ロ)賢・善・精進と念仏の関係

最初の問題、行・証が仏教の要だと。その場合、仏教の行というのは証に至るから行という。ただ単に難しいことをすることを行というわけではありません。そしてその行とは、証りを開いた人でなければ、行を表すことができないということで、仏が説かれたものが行という意味になってくる。

経典というのは教えが説かれて

いるわけですが、その意味では、行・証がその内容になってきます。行証を内容とする言葉の集合が教え。つまり経典には教行証が説かれている。

ですから『阿弥陀経』には何が説かれているのかといえば、それは浄土の教行証が説かれていると言わなければなりません。その行は何かといえば、行は念仏です。では証はなにか。証は言うまでもなく大般涅槃、無上涅槃と言わなければなりません。

この無上涅槃とか大般涅槃というと我々には掴みようのない言葉ですが、『教行信証』で確かめてみますと、「信巻」に「真の仏弟子」ということについて、

「この信・行に由って、必ず大涅槃を超証すべきがゆえに、「真仏弟子」と曰う。」

（聖二四五頁）

そしてこの「真の仏弟子」を結ぶところで、

「念仏衆生は、横超の金剛心を窮むるがゆえに、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す。」

（聖典二五〇頁）

「大涅槃」とか「大般涅槃」と、親鸞は、なぜこういう事柄にこだわるのかという問題です。我々には、往生という言葉なら多少は身近ですが、無上涅槃の証りを得ることなど頭にありません。では往生と大涅槃とはどうなるのか。

するとどうも往生というのは自覚を表す。必ず大涅槃に至ることができるという自覚を往生という言葉で表したわけです。もしそういう往生という自覚がなかったら、大涅槃も分からない。そういう点で、無上涅槃に必ず至ると確信できた。そういう確信を表すために往生を出すわけです。

「証巻」の「標挙」（聖典二七九頁）に「必至滅度の願」とあります。これは四十八の願文の第十一願ですが、「滅度」というのは無上涅槃、大涅槃のことです。ですから「必至滅度の願　無上涅槃」と出せばいいのですが、親鸞はそうされずに「必至滅度の願　難思議往生」と、「往生」という言葉で必至滅度ということを表わされます。

それは、往生ということがはっきりするならば、無上涅槃は得られたと同じであるということで、難思議往生と往生を出して、自覚ということを表されたわけです。仏と同じ証りが得られることが確信できた。したがって、真宗の証はいうまでもなく無上涅槃だが、そういう無上涅槃が確信できるという往生を証りとして、「証巻」で取り上げられるわけです。

つぎに行・証の行ということですが、行はいうまでもなく念仏です。この念仏が行だということを考えていくうえで、レジメでは「賢・善・精進と念仏」と問題を出してあります。賢・善・精進ということも、これは行として考えられる事柄です。

経典には仏の教行証が説かれていると言いましたが、そのことをよく理解して、そのうえで説かれていることを行じていく。そのよく理解してという部分が賢。そして行じていくところに善という意味があり、そのことを続けるところに精進がある。ですから賢・善・精進が行の内容になります。

この問題は、念仏でも同じ了解になっていきます。まず念仏の意味を理解しなければならない。わけも知らず念仏するわけにはいかないということで、まず賢が求められます。そしてその実践するところに善が言われ、行住座臥を問わずですから、念仏も賢・善・精進が内容になります。念仏に賢・善・精進が求められるという念仏の理解です。

この賢・善・精進というのは、方向で言えば、仏の証りに少しでも近づいていくという方向です。よく理解するということも、頑張って続けるということも、仏に近づこうというこころです。ところがそれに対して、念仏は仏が我々のほうに近づいてくださる方向で

あるというのが、親鸞聖人の念仏のご了解です。まったく方向が違うわけです。

では何をもって近づいてくださるのかというと、それが仏の名号、南無阿弥陀仏という仏の名号をもって、仏は我々に近づいてくださるのだと。ですからその南無阿弥陀仏という仏の名号は、そのまま仏教の教行証という意味を持っているわけです。南無阿弥陀仏という仏の名号が、教えという意味を持ち、証りに至るという意味を持っている。

念仏が教えという意味ですから、まず我々に近づき呼びかけるわけです。そして近づくだけでなく、我々を導き、翻すという意味が出てくる。すると自分が立っている立場が明らかにされてその立場が翻る。こういう内容が、念仏が行だという意味になります。我々が口にするから行というわけではないのです。

念仏が行だという意味は、南無阿弥陀仏が持っている。その南無阿弥陀仏が我々を導き翻すということがあるから行という。我々が努力して、またこころを込めて口にするから行というのではないのだと。それなら念仏は発音になってしまう。生活に響いてこないわけです。南無阿弥陀仏が我々を導き翻すということは、生活に響いてくるということです。つまり念仏が大事だというのは、念仏が生活の指針になるからなのです。

念仏が生活指針という意味をはっきりとおっしゃったのが法然上人です。法然上人の時代は、仏教は盛んになっていたが、それは比叡山や奈良を中心とする顕教と、高野山を中心とした密教。そういう顕教、密教の考え方が政治や経済、社会の制度と、生活の隅々まで支配していたわけです。ですからどういう生き方をすればいいのかとした場合、顕密の考え方が指針になるわけですから、出家者が手本となります。

そのような時代に、法然上人は、どのように生活すればいいのですかという問いに、「念仏できるように生活しなさい」とおっしゃったわけです。念仏を生活の指針とするということです。

いわく、「一人で念仏できないなら、みんなで念仏しなさい。みんなと一緒にできないなら、一人で念仏しなさい。結婚して念仏できるなら、結婚して念仏しなさい」と。法然上人のただ念仏とは、念仏できるように生活してくださいという、つまり念仏が生活なのです。発音ではなく、生活の指針だったわけです。

そしてそのことを受けて、宗祖は「行巻」で、南無阿弥陀仏と念仏することは、我々が賢・善・精進を尽くして如来のこころに近づいていく方向での行ではないのだ。如来のほうが、我々に近づき、我々を導き、そして翻すという意味で行なのだということを問題にされたかと思うのです。

この「行巻」ですが、二つの内容に分かれます。前半は念仏の教行証を伝えた歴史、つまり七高僧の歴史です。ですから七高僧の著作がずっと引用されている。そして後半は念仏が大乗であるということを証明することで展開していきます。その中間点が真宗聖典の一九〇頁の『浄土論註』の文になります。この文章を境に前半の念仏の歴史、七高僧の歴史と、後半の大乗という問題。そしてそれらのまとめる形で『正信偈』があるわけです。

この大乗ということが、通ずるという問題です。そしてそれを表しているのが、中間点の『浄土論註』の文です。

「かの安楽国土は、阿弥陀如来の正覚浄華の化生するところにあらざることなし。同一に念仏して別の道なきがゆえに」

（聖典一九〇頁）

ここは『論註』で「眷属功徳」について表すところですが、この「眷属」というのは、最も親しい間柄、血の通いあった仲間のことです。振り返ったらすぐ後ろにいるもののことを眷属というわけです。

ですから七高僧が伝えた念仏は、あらゆるものが親しい間柄になる。よく通じ合える関係になるということを、「行巻」の後半の、大乗という問題で表そうとされたわけですが、次回この大乗の意味について考えてみたいと思います。

（平成五年度　第二回講義

平成五年七月一二日）

本の紹介

●真宗大谷派
御文拝読稽古本 CD付き

真宗大谷派宗務所本廟部　編集
定価4，500円(税別)

五帖御文・夏の御文・御俗姓、さらに所作法の解説を一冊に収載しました。おもて表紙から開くと御文拝読の稽古本として、うら表紙から開くと所作法の解説本として使用できます。

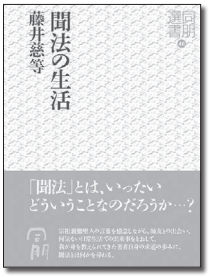
本文は大谷派伝統の読法を可能な限り反映。また拝読の所作法をオールカラー・写真付きでわかりやすく解説しており、さらに代表的な御文十通を収録したCDも付属しています。これから御文拝読の練習を始める方にも、あらためて所作法を確認されたい方にもおすすめの一冊。

●同朋選書46
聞法の生活

著者　藤井　慈等
定価1，000円(税別)

真宗門徒が大切にする「聞法」とは、いったいどういうことなのか…。

宗祖親鸞聖人の言葉を憶念しながら、師友との出会い、何気ない日常生活での出来事をとおして、我が身を教えられてきた著者自身の求道の歩み、〝聞法の生活〟が、日記調のやさしい言葉でつづられた一冊。



●伝道ブックス80
仏さまのよびかけ

著者　藤原　千佳子
定価　250円(税別)

仏法を聞いても経済的に得をするわけでも、病気が治るわけでもないのに、仏法を聞く必要があるのだろうか…現代社会に生きる私たちは、そんなことを考えてしまいがちではないでしょうか。

『教行信証』「総序」や和讃などの親鸞聖人のお言葉や、著者自らの宗教的原体験であるお念仏の教えに生きる人びととの出会いをとおして、仏法を聞くとはどういうことなのかをやさしく語ります。

●あなたへのメッセージ③
病に悩むあなたへ

著者　田畑　正久
定価　300円(税別)

あなたへ贈るあたたかいメッセージシリーズ第3弾。

今回は、医師として生と死の現場を長年見つめ続けてきた田畑正久さんによる『病に悩むあなたへ』。病という現実に直面したとき、そのつらい事実とどう向き合い、生きてゆくべきか。医師であり仏教者である田畑さんが、その歩みをとおして、病に悩む人、身近に病に悩む人がいる方へのメッセージをやさしくつづる。

編集後記

巻頭言は昨年度まで長きにわたり学院の声明作法を指導していただきました能浦先生にお願いいたしました。正信偈の結歓の「弘経の大士・宗師等」の「等」とはだれのことかという問いに、あらためて自分が「等」の一人であったことを気づかせていただきました。

一泊研修では、グリーフケアについて学びました。大切な人を失い、さまざまな思いをおもちの方々に対して僧侶は何ができるのであろう。講師の先生が、ご自分のご家族を亡くされ、悲しみ苦しみの中で、知人の僧侶から「あなたの大切なご家族は、今、苦しみのない浄土に帰られたと私は信じています」。その僧侶の言葉で先生自身が救われたと言われていました。僧侶である自分が伝え語る重みを感じました。

平野修先生の「教行信証」入門では、どのような生活であろうとも仏教は開かれ、信心ということをもって、念仏を生活の指針とする人々の関係が生まれるのだと教えられています。

その関係について、月忌参りで九十歳を超えたお婆ちゃんと一緒に正信偈を勤める家があります。一緒に勤める正信偈は大きく響く声なのです(音程は、ずれるので大変ですが)。娘さんは、すいませんうるさくてと申し訳なさそうに言いますが、お婆ちゃんの正信偈は娘さんたちご家族の全身に響きわたっているでしょう。

（安部）